

神西清の散文問題

小林実（著）（2019年10月，春風社）

十文字学園女子大学 教育人文学部文芸文化学科 准教授 落合真裕

外国文学の翻訳という活動は、単に他国の文化や思想の導入とどまらず自国の文学に刺激と発展をもたらす。日本は上代から近世において古来中国の文学の翻訳により新たな形態を生み出し独自の文学を創造していった。そして、明治に入ると国家の近代化の歩みにともない西洋やロシアなどの外国文学の摂取が盛んに行われるようになった。翻訳という営為により外国語の訳としての新語の造語や外国語の輸入など、近代日本文学の形成や発展にも大きな影響を与えることとなった。

近代の作家の多くは、翻訳と創作を同時並行で行っていた。例えば、二葉亭四迷は近代リアリズム小説の創作とともに、I.S. ツルゲーネフ、N.V. ゴーゴリなどのロシア文学の翻訳をしていた。森鷗外もまた、小説創作をするかたわら西洋の小説や詩の翻訳本を世に送り出していた。

大正末期から昭和にかけて、彼らと同じように創作活動も行いながら文学研究と翻訳活動に邁進した文壇人のひとりに神西清（1903～57）がいる。彼はF.M. ドストエフスキー、A.S. プーシキン、I. ツルゲーネフ、などのロシア文学のほか、H. バルザックなどフランス文学の翻訳家としても名を馳せた人物である。また、翻訳以外にも小説、評論、詩、短歌など多岐にわたって活躍を見せた。日本の近代翻訳文学の研究者である筆者は、ロシア文学の翻訳家と翻訳の意義について多様な視点から論じた研究論文をこれまで複数発表してきており、本書では神西の「現代日本語のぶざまさ加減」ということばをきっかけに、彼の翻訳と散文について考察している。

名翻訳家として知られている神西の翻訳に対しては、直訳ではないという批判も存在するが、彼の翻訳を翻訳論の観点からではなく、日本語論の範疇で論じることが適切ではないかと筆者は述べている。というのも、神西は日本語が未熟であることに問題意識を持ち、翻訳を通して新しい日本語の散文を創造しようとした一文壇人であるからだという。

西洋言語やロシア語と比較して近代日本語は豊かな音楽性に欠けている。外国文学を日本語に容易に翻訳できない要因のひとつはそこにあると神西はいら立ちを募らせていた。筆者は神西が他の翻訳者と異質なのはこの点にあると指摘する。漢語使用と七五調の韻律により音楽的な美しさを失ってしまった日本語の文章に、響きを意識させようと新たな散文スタイルを神西は模索していたようである。筆者は原文と二葉亭、米川正夫ら、そして神西の翻訳を比較分析し、神西がことばを訳すという姿勢から原文を読んだときと同じような体験ができる表現（エクスペリメンテーション）を追求することで、新たな日本語の文章を創造しようと試みていたことを明らかにしている。

本書は神西清というひとりの翻訳家の軌跡をたどりながら、彼が日本語の未熟さに憤りを感じ、プーシキンのように母語の新たな散文の創造に貢献しようと真剣に日本語と向き合った作家であったことを伝えてくれている。日本語が未熟で成長過程にあるというのは、言語は絶えず変化し続けていく生きもののものであることを我々に再認識させてくれる。それが言語の面白さでもあり、また、神西のことば

へのこだわりを説明できる理由のひとつとなるかもしれない。日本の文学が多言語に翻訳されている今日、本書は使い慣れた日本語について見つめ直す新たな視点をもたらしてくれるだけでなく、言語そのものについての更なる可能性を見出す機会を提供してくれている。